

2009 年度院生海外フィールドワーク報告

プレスビテリアン・ホームでのフィールドワークを終えて

市瀬 晶子

同志社大学 大学院 社会福祉学専攻 博士後期課程 4 年



大学院 GP の助成をいただき、アメリカ・シカゴ近郊にある高齢者施設に 2 度目のフィールドワークに行ってきました。ミシガン湖上を吹いてくる風が寒さを増し加え、2 月のシカゴの寒さは大変厳しかったですが、15 時間の時差で昼夜が逆転し、眠りたいと思っても眠れない不眠症の辛さも味わいました。

調査先のプレスビテリアン・ホームは、1900 年代初めに長老派のキリスト者達によ

って経済的に困窮している長老派の高齢者のためのセトルメントとして始められました。現在では全ての宗教・信仰を持つ高齢者の身体的、知的、社会的、情緒的、スピリチュアルなニーズに仕えることをミッションとして掲げ、高齢者のケアが行われています。フィールドワークでの私の調査課題は、キリスト教社会福祉実践の観点から、高齢者のケアのありかたを検討することでした。今回は初期の認知症ケアの居住棟に入居している高齢者 6 名にインタビューを依頼し、特に信仰生活に焦点をあててライフストーリーを伺いました。インタビューの協力者の一人であった 96 歳の女性は、それまで住んでいたコテージから認知症ケアの居住棟に移る際が人生で一番難しいことであったと語っていました。京都市内の特別養護老人ホームでのフィールドワークでも、ショートステイで来た高齢者が「(施設の) 前は何度も通ったことがあるけれど、中に入るのは初めて。どんな所かと思ってしばらく前から緊張して眠れなかった」と話していたことがあり、家から出され、なじみのない人々に囲まれ、見知らぬ部屋で眠るのは簡単なことではないと感じました。あるソーシャルワーカーは、「健康状態が変化し、助けがなくては安全を保てなくなっても、高齢者は移住を望まず、NO と言う権利がある。そのことがソーシャルワーカーにとって最も難しい」と、高齢者が居住を移行する際の援助が最も難しいと述べていました。

認知症ケアのフロアでは、毎週日曜に礼拝が行われていました。私の参加したときは、イエスが荒野にいて、試みにあったときのストーリーが語られました。「イエスは、『これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ』と自分に語られる天の父の声を聞き、荒野で試みにあったときも神を信頼していた。神を見ることができなくとも神を信頼すること

が信仰であり、荒野において信仰が見出される」ことが語られ、そのストーリーからは、荒野で孤独な試練にさらされているような存在のありようにおける、スピリチュアルケアの可能性が伺えました。今回のフィールドワークを通して見えてきたことを通して、高齢者が居住を移行する際のケアのありかたについてさらに調査を進めていきたいと思えます。最後になりましたが、厳寒のシカゴで、暖かい家と温かい食事を提供して私たちを助けてくださった Daniel Lee 先生と Grace 夫人に心から感謝申し上げます。

アメリカ・シカゴでのキリスト教社会福祉の現状

李 善恵

同志社大学 大学院 社会福祉学専攻 博士後期課程 2年



去る 2 月 15 日から 3 月 13 日までの約 1 ヶ月間、海外フィールドワークのプログラムを通してアメリカのシカゴに訪問した。今回の調査目的はセツルメント運動の根拠地である Hull House を始め、キリスト教に基づいた施設に訪問して資料を収集することと、民間を中心とした社会福祉サービス、特に教会を中心とした社会福祉活動の現状について資料を収集することである。

まず、Presbyterian Homes(サービス内容：Independent Living、Assisted Living、Nursing and Memory Care、Community Services)と Lutheran Social Service of Illinois(サービス内容：Substance Abuse Residential Extended Aftercare)と The Salvation

Army Corps Community Center(サービス内容：Food Pantry、Clothing & Furniture Vouchers、Utility Assistance、Rental Assistance)などの施設を訪ねて、どういうふうにキリスト教と関わっているのか、また地域住民のためにどのようなプログラムが行われているのかについて牧師、ソーシャルワーカー、ケースワーカーなど、様々な領域の専門家と話し合う機会を持った。

そして、教会を中心として行っているソーシャルサービスについて調べた(詳しい内容は下の表を参考)。簡単に言うと、Moody Church ではアフリカ系アメリカ人の児童の教育のために 2001 年から始まった By the Hand、Willow Creek Church では貧困問題の解決するために始まった Compassion & Justice、Fourth Presbyterian Church では homeless たちのために始まった NPO 法人のシカゴライトなどがある。プログラムを担当している教育家、ソーシャルワーカー、牧師などの話を聞き、ソーシャルサービスを始めた当時の背景や今

日の状況、規模について学んできた。

その中で、By the Hand というプログラムで、いくつか印象が残ったものがある。まず、私が訪問したときは Black History Week といって、アメリカの中で名声を博したアフリカ系アメリカ人について学ぶ時期であった。Michael Jackson、Louis Armstrong、また Gift Hands という映画の主人公である Ben Carson、William Franz Elementary School にアフリカ系アメリカ人として初めて入った Ruby Bridges など、彼らの人生を紹介しながら、今の状況を変化する可能性について先生たちが子どもたちに教えている気がした。また、98% 以上のアフリカ系アメリカ人の児童のために熱心に奉仕している人々は、ボランティアを含めて白人が多い。ただし、このプログラムが 9 年くらい過ぎたので、今はここに通った子どもが大学に入ったり、高校を卒業して就職したりして、またここでボランティアとして働いている人々が増えている。これを聞いたときは感動で胸に一杯だった。今日の By the Hand は、最初は Moody Church を中心となって始まったが、様々な教会やキリスト教信者が連帯して行っている。

その他にはセツルメント運動の根拠地であった Hull House museum と Headquarter に訪ねて資料を集めたり、Women's Christian Temperance Union の Museum に訪ねてその当時の禁酒・節制運動の状況について聞いたりした。今回の海外フィールドワークを通して、キリスト者または教会を中心となったキリスト教社会福祉のあり方について改めて考えさせられ、有意義な時間となった。

	By the Hand	Chicago Lights	Compassion & Justice
対象	子ども	サービスが必要な人、家族	サービスが必要な人、家族
背景	<ul style="list-style-type: none"> ・2001年、Moody Church のメンバである Donnita Travis よって始まる ・Loving the whole child : mind, body and soul 98%が African American の子供で、その中で、18歳以下が40%であった 	<ul style="list-style-type: none"> ・1961年、Fourth Presbyterian Church に Elam Davis 牧師が赴任してから本格的に社会福祉サービスが行なっていく ・最初はホームレスのための食事提供から始まった ・教会のチャーチプレズは A light in the city 	<ul style="list-style-type: none"> ・Willow Creek Church が中心となって 1985 年から Care Center と Food Pantry が設置され、運営していく ・最初はホームレスのために食事提供から始まった
組織	NPO	NPO(1991年最初にNPOを組織⇒2004年Chicago Lightsと名前に)	
規模	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者:726名(⇒2012年まで1,000名が目標) ・5ヶ所(Cabrini-Green、Austin、Altgeld-Murray、Englewood)⇒今後、9ヶ所を増設 	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者:7,000名 ・50名の職員と1,000名のボランティア ・その他にも100個の組織と連帯されている 	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者:600,000名 ・53,000名のボランティア(シカゴには serving group を一人が担当している)
備考	一人当たり5,700\$が必要だが、ほとんど無料で利用している(資金は政府3%、財団10%、Moody Church 8%、個人寄附40%、イベントやバザー39%)。	<プログラム> <ul style="list-style-type: none"> ・Tutoring(1964年から):400名の学生 ・Life and Learning (1965年から):senior Program ・Lorene Replogle Counseling Center (1976年から) ・Summer Day(1981年から):Arts Activities ・Social Service Center (1983年から):150余名 	<ul style="list-style-type: none"> ・6.7million dollars は宣教費 ・11.6million dollars は救済費 <プログラム> <ul style="list-style-type: none"> ・Local Outreach (Children・Youth : tutoring & coaching、Prison・Jail、Elderly:nursing、Homeless:food pantry & Shelter など) ・Care Center ・Local Serving ・Global Connection (シカゴには食事提供の Manna

		<ul style="list-style-type: none"> ・ Whole Health(1986年から) ・ Literacy and Arts (2000年から) : 1、000名の学生 ・ Free Write Jail Arts and Literacy (2001年から) ・ Outreach(2003年から) 	Ministry Program、2 Fishes Street Team、Cook County Jail Team と Lasalle Senior Center、また様々なサービスが他のグループと連帯して行っている)
--	--	--	---

韓国の高齢者福祉施設の地域福祉実践を覗く

羅 珉京

同志社大学 大学院 社会福祉学専攻 博士後期課程1年



3月とはいえ、フィールドワーク先の韓国はまだまだ冬の模様であった。今回のフィールドワークでは、韓国の施設が地域社会とどう関わっているのか、いかに地域社会の一資源として機能しているのか、その現状を覗くこととした。そのために、私はソウル市、仁川市、京畿道、江原道に所在する4カ所の高齢者入所型福祉施設(以下、施設とする。)を訪ねた。

施設と地域社会との関係について、①施設の持っている専門機能や設備、場所が地域住民にどう活用されているのか、②施設が地域住民とどのような支

えあい活動を行っているのか、③施設の情報公開や諸関連機関との連携など、マネジメントがどのようになされているのか、④施設が地域との関係づくりのための経営理念を掲げ、地域志向の実践にいかにか努力しているのかなどを取り上げ、施設長にお話しをうかがった。

その中で課題として挙げられたものをいくつか紹介したい。まず、施設の専門機能や設備、場所の提供の問題がある。それは福祉教育や啓発活動、地域住民との交流活動などに提供することであるが、ほとんどの施設が設備の拡充や場所の確保に経済的に余裕がなく、日常的に提供することが難しいとのことであった。また、施設運営の住民参加においては、ボランティア活動の低迷や後援金の減少、広報誌や機関誌発行への参加活動が低いことがあげられた。さらに、施設情報の公開や諸関連機関・団体、研究機関等の連携が十分なされていない状況であった。他にも地域との関係づくりのための専従職員の配置や研修など、地域志向実践がほとんどみられなかった。

これら施設が抱えている課題の背景には、ここ数年間、施設をめぐる環境の変化によるものが少なくない。その変化の一つに、2008年に施行された老人長期療養保険制度がある。この新制度の導入を機に、施設数が急増し、サービス利用者数の増加も著しい。このようなか中で長期療養保険機関となった施設は、新たな施設経営・運営にとらわれ、今のところ

は地域を視野に入れた福祉実践というより、介護サービスを重視する傾向にあることがうかがえた。一方で施設の課題に対して、施設を地域に開くための多様な工夫やプログラムの開発への意欲、施設に対する地域社会の意識改善・向上や地域との相互理解と協働の必要性を強く認識していた。

施設にとって、そこに暮らす高齢者への介護サービスは欠かせない役割である。しかし、施設が諸事情によりやむを得ず自宅を離れている高齢者に対して、それまでの生活が継続できるように支援するためにも、地域社会との関わりは重要な役割といえる。最近日本では地域に根ざした施設、地域社会の福祉資源としての施設の役割が強調されている。今後韓国の施設が高齢者だけでなく、その家族や地域住民など、人びとの生活課題に対応できる地域社会の一資源となることを心待ちにしたい。

今回のフィールドワークは、大学院GPの助成を受け、実現されたものである。私にとってこれからの研究を深めていくにあたり、有意義な学びであったことを改めて感謝申し上げます。

海外フィールドワークを終えて

木内 さくら

同志社大学 大学院 社会福祉学専攻 博士前期課程 2年



大学院 GP プログラムの海外フィールドワーク制度を利用して、私はアメリカ・ワシントン州のシアトルに行きました。目的は、アメリカでの里親と養子縁組制度について現地での取り組みの実際を知ることでした。滞在中は主に州の児童保護局で働くソーシャルワーカーの方にお話を聞き、いくつかの私立の里親・養子縁組サポート機関のプログラムや施設を見学させていただきました。

アメリカと日本を比べると、児童を取り巻く制度の違いが大きく感じられます。里親・養子縁組家庭の数の多さだけでなく、何よりほぼ全ての制度の根底に児童の権利保障という視点が据えられています。

里親家庭や養子縁組家庭へのサポートプログラム等も多岐にわたっており、日本に取り入れたいものがたくさん実践されています。例えば里親登録前の研修では、生まれた家庭から引き離される子ども達が心に負う傷についての理解に多く時間が配分されています。私も一部分だけ参加することができ、貴重な体験でした。またアメリカでは、日本でいう

児童養護施設はなく、施設形態であっても小規模型やグループホームの形です。ある私立機関の施設を見学させていただいた際、日本の現状を説明したところ、大変驚かれてしまい、改めて日本の現状について考える必要があると感じました。

一方で、児童を取り巻く状況は、日本以上に深刻かつ悲惨な場合も多いと言えます。ドラッグ中毒の親から生まれる、ドラッグベイビーと呼ばれる乳児専門の治療施設やプログラムがあるほど、ドラッグは児童の問題に密接に関係しています。日本ではそのような施設がないこと、それほど必要に迫られている話を私は聞いたことがないことを伝えた際、1人のワーカーの方が「幸せな国ね」とおっしゃっていたのが印象的でした。

今回のフィールドワークで最も強く感じたことは、アメリカの制度をそのまま日本で実践することは容易ではなく、だからこそ日本型のモデルを構築することが求められるのだということです。里親制度や養子縁組について抱える課題はアメリカと日本で似た部分も多くあります。自分自身で実際に現地の取り組みを見ることで、打開策として実践されているプログラムを手本とするのと同時に、日本に即した形とはどのようなものかを模索していくべきだと改めて強く思いました。

知識として頭で理解していたことを、実際に自分の肌で感じ、研究の糧として吸収できたこと。貴重な経験として大切にしながら、今後の自分の研究に生かしていきたいと思えます。

アメリカの高齢者雇用の動向

朴蕙彬

同志社大学 大学院 社会福祉学専攻 博士前期課程 2年

この春に大学院 GP の助成を受け、アメリカのフロリダ州に海外フィールドワークを行かせていただいた。フィールドワークはフロリダ州にある Florida Senior Worksearch (以下 FSW とする。Sarasota に本部があるが、今回は Fort Myers 市にある支部で行った。) という機関と働く高齢者へのインタビュー調査を行った。

FSW では職員の Mary Bone さんがインタビューに応じてくれた。FSW は AARP (American Association of Retired Persons、全米退職者協会) と U.S. Department of Labor の助成を受け、Senior Community Service Employment Program(SCSEP、高齢者地域社会サービス採用プログラム)を実施する機関である。SCSEP は Older Americans Act (米国高齢者法) によって 1965 年から始まったプログラムであり、AARP は 1969 年からこの事業に参加したという。現在は 28 の州で 73 のプロジェクトを実行している。SCSEP は仕事がない 55 歳以上の低所得高齢者にパートタイム型の就業を提供し、自立を支援しているらしい。

FSW がある事務室は LEE COUNTY の Lee Memorial Hospital が二つの事務室を借り、

無償で8つのNPOに貸しているものであった。各団体はそれぞれ賃貸以外の費用を負担しあって利用しているらしい。FSWではまず、仕事を求める高齢者（55歳以上の低所得者）に週に20時間の有給（政府による援助で最低賃金）の訓練をさせる。訓練ではパソコンの使い方、働く中で怪我のないように自分を守る方法、その他の希望するさまざまな技術などを習得することができる。

Mary Boneさんは、彼女自身もSCSEPの利用者でありながら、この職に就職して7ヶ月になったらしい。一日に5~6人の高齢者が職を求めてくるが、経済難のため1~2人ぐらいが就職までつながるといふ。また、機関を訪れる人の中にはスペイン人の人が多く、彼らは技術を持っていなく英語が出来ないため就職が難しい課題がある。多民族国家ならではの課題であり、財政的にもそのような人が多いと厳しい状況であることがわかった。次に、パートタイムで働く何人かの高齢者に話を伺うことができた。中には高齢者を一定以上の割合で雇うことが決まっているところ（例えば、スーパーなど）もあった。実際に働いている人も仕事を探すのに年齢による差別は感じなかったという。また、アメリカでは働き方が自由でパートタイムの職業が多く、日本や韓国とは労働市場の仕組みが異なることを改めて感じた。一方、他の地方から冬を過ごすためフロリダにこられた方も短期間の就職に苦がなかったという。その方によれば、他の州では高齢者が働くことが難しいところもあるが、フロリダは高齢者の休養地という特徴もあって働くことだけでなく、高齢者が老後を送るのにいい町であるといわれた。

今回のフィールドワークでアメリカにおける高齢者が働くことは法律できちんと守られ、自由な働き方が若いごろから身につけているため、韓国や日本とは異なる点が多いことがわかった。また、SCSEPという政府のプログラムをAARPが一緒に行うことでお互いにプラスになっていることなどこれからの研究に大変参考になると思われる。最後にインタビューに応じてくださった方々やフィールドワークができるようにしてくださった方々にお礼を申し上げたい。



韓国の WE START の現場を訪ねて

白承國

同志社大学 大学院 社会福祉学専攻 博士前期課程 2年



2010年2月、同志社大学のGPプログラムである海外フィールドワークを利用して、韓国のWE STARTの現場調査を行った。日本も近年、「子どもの貧困」に対する問題の深刻さに伴って多様な調査と政策が行われているが、同じく韓国でも「貧困児童」に対する関心は1990年代後半から本格化され、2003年に貧困児童に対する深刻性が中央日報(新聞社)によって大々的に報道され、全国の社会福祉団体と関係者が一つになって、韓国型HEAD STARTであるWE STARTが始まるようになった。

WE STARTというのは私たちの(WE)皆が、貧困児童の新しい人生の出発(START)を助けようという意味である。また‘WE’は福祉(Welfare)と教育(Education)の英語の頭文字で、この二つが運動の中核的な領域という意味も込められている。

今回の調査の目的は二つであった。一つ目は、WE START運動本部と現場の担当者へインタビューであった。正確なデータと理論を土台に実践されたプログラムであるだけに、本部でしか聞くことのできない内容を確認することと、このように徹底された準備を基に始められたプログラムの現場での活用度と、実際に利用している人からどのような評価を受けているか等を確認することであった。

WE START運動本部の担当者へのインタビューは、韓国の旧正月のお菓子和共に穏やかな雰囲気が進めることが出来た。WE STARTの歴史とプログラムの全般的な説明を聞いてから、質疑応答の時に「2007年から始まった政府主導政策事業のDREAM STARTと統合する意志はありますか？」に対して、「2004年から様々な試行錯誤を体験して、実験的なWE STARTをモデルとして、2007年からDREAM STARTが始まった。二つのSTARTのプログラムの統合が優先されることではなく貧困児童にどれだけ高品質で統合的なオーダー型サービスを提供するのかがより一層重要である」と答えてくださった。そして、ソウル江北(カンブク)村の現場を見回って、担当者へインタビューした結果、「利用している人の反応があまりにも肯定的で、サービスを受けている子どもの驚くべき変化に仕事のやりがいを感じる」と答えてくださった。自分も現場で多様なプログラムに参加している子どもに会って実感したが、担当者が自分の家族のように愛のラインが形成されていたし、何より子どもの両親の満足度が相当に高かった。

二つ目の目的は日本にどのような示唆があるのか、を明らかにすることである。

まだ政府主導的なSTARTプログラムがない日本に、大きな示唆を提供できることは、韓国では社会福祉研究者、地域社会、社会福祉従事者(社会福祉士、臨床心理士、看護師など)、

公務員などすべての人の心と気持ちが一つになった点ではないかと思う。つまり、今子どもが何を求めているのか、何に悩んでいるのか、未来の希望等に子どもの目線でプログラムを開発してすべてのサービスを提供する姿勢ではないだろうか。もちろん日本も多様なプログラムが存在している。しかし、いまだに社会的な関心度が低いようだ。人的資源のネットワーク形成に大きな力を入れなければならないことが日本に与えられる示唆ではないかと思った。

変化する現代社会に適応できない貧困児童のために、子どもの視点と姿勢が必要だということを再認識できたのが、今回の海外フィールドワークを通じて学んだ点ではないかと思う。その結果、自分の研究に役に立つ関係機関とのつながりを得られたし、今後の修士論文執筆において重要な成果を得ることができたことに、満足している。そしてこのような機会を与えていただいた関係者の皆様に深く心から感謝したい。

韓国の老人長期療養保険在宅サービス提供機関の動向

李 宣英

同志社大学 大学院 社会福祉学専攻 博士前期課程2年

私は、2月から3月中旬まで、大学院 GP の助成を受け、韓国のソウル市の老人長期療養保険の在宅サービス提供機関を訪れ、提供組織の主体別にサービスの内容や経営理念、運営状況がどのように異なっているのかを中心にインタビュー調査を行った。

大きく分けて公立民営と私立民営機関を対象とし、①利用者確保の面、②サービス提供の面、③財政の面に関して調査を行った。その機関の中で、公立の場合は、全て制度の実施される以前から事業を行ってきたところであり、民間機関の場合は制度の実施により新しく設立された機関であった。

まず、①利用者確保の面に関して、民間の場合には競争がとても激しく、広報活動にも工夫をしていると答えたが、公立の場合には、利用者をめぐる競争がなく、逆に定員を超え、待機している対象者が多く他の民間機関を紹介している状況であると答えた。つまり、老人長期療養保険制度の導入と共に競争体制が導入されたとしても、それは民間機関に限るものであり、公立の場合は制度の適用以前から実施されていたということもあり、まだ広報の必要性を感じていないと答え、競争などを意識していないと感じられた。

次に、②サービス提供の面については、公立の場合、既存に提供していたサービスより質を高めることに主力を傾けているとした。民間の場合は、サービスの質を高めるための努力の前に、利用者が少なく事業自体の存続に危機を感じていると答えたところが多かった。特に、同制度が社会保険方式をとるようになって1年あまり過ぎ、各種インフラ不足のため対象者を幅広く包括していないのは周知の事実であるが、要介護の認定をもらい、サービスを利用していた対象者の中でも、翌年の判定で認められず、利用できなくなるケ

ースもかなり存在しているという状況であった。公立機関の場合に、民間機関と比べ、サービスの質を高めるために力を入れているというのは、収益とは関係なく公共の保護の下でサービスを提供しているというのがかなり影響を与えているのではないかと思った。

最後に、③財政の面に関しては、ソウル市内のデイケアセンターの中、公立民営の機関は全ての所が「ソウル型デイケアセンター」の認証を受けソウル市から運営事業費の補助をもらっていた。「ソウル型デイケアセンター」とは、ソウル市内のデイケアセンターの中で、運営時間を8時から22時まで延長することを前提とし、一定の条件を満たす機関に対して認証を行い、年間1億～10億ウォンの運営費用を補助する制度である。これは公立に限っているものではないが、現在、認証を受けた95ヶ所の中、61ヶ所が公立民営であり、3ヶ所が民立民営である。つまり、公立民営の場合、事業を通じての収益とは別に、ソウル市から補助金をもらっているため、財政の面では全く困っていないと全ての機関で答えた。さらに、公立の場合、社会福祉館の併設の方式で運営している所が多く、センター長、看護師、栄養士などの職種は福祉館と兼任するように設定していて、人件費の面でも民間機関より有利な状況においてあることがわかった。

今回の調査は、在宅サービス実施状況が組織主体別にどのように異なっているのかを把握するための調査であり、組織の主体別におかれている状況がかなり異なっていることが明らかとなり、今後の研究のために有意義な示唆を得ることができた。

